

【目的】ヒトは、家族の中で生まれ、家族の中で育てられて、人間として成長することが出来る。“変容しつつある”と今日言われている家族や家庭生活は、「子育て」の側面から見たときに、どのような位置づけとなるのだろうか。子ども達が捉える家族・家庭生活はどのようなすがたであるかについて、今回は崩壊家庭で育つことを余儀なくされた子どもや家庭生活の経験の乏しい子どもたちが表現した『ごっこ』遊びの観察資料の分析を通して探った。

【方法】群馬県内T養護施設に在所する幼児18名について、朝食後の午前中の自由遊びの活動を観察し記録した(VTR併用)。観察時期は、1993年8月。

【結果と考察】①全体に子-子間のかかわりは多く、異年齢間も多い。身体接触を必然以上に行いベタベタとした直接的かかわりである。遊びの焦点化は乏しく、長続きせず、ゴロゴロと所在なくしていることが多い。②見立て遊びは個々に断片的には見られるが、まとまりのある「ごっこ」として展開されることは少なくそれぞれ遊びであり、「ごっこ」の中の“やりとり”はほとんど見られない。③家庭生活の「ごっこ」の出現は少ないが（「お母さんごっこ」の命名は全くない）、そこでは「寝る」「食べる（食卓を囲んでの食事場面ではなく素材を手にして食べるフリ）」「赤ん坊の世話（寝かせる・食べさせる・おむつ交換）」が見られ、家族関係を表す発言はほとんどなく、家族員の存在感は希薄である。また「ごっこ」の中では急にフォーマルな言い方になる。④これらの結果から、円満な家庭生活の実体験の乏しい幼児にも僅かながら「ごっこ」は見られるが、それは、成員間の共通認識の調整に基づくイメージの共有を楽しむというよりも動作優位のパターン化された一種の儀式的遊びに近いようである。